

霊宝館だより

題字・畚野光義師

霊宝館だより 第110号

平成26年4月15日発行

和歌山県伊都郡高野町高野山306

公益財団法人高野山文化財保存会

高野山霊宝館

電話 0736-56-2029

URL <http://www.reihokan.or.jp>

利用案内

開館時間

5月1日～10月31日

8時30分～17時30分

11月1日～4月30日

8時30分～17時00分

■休館日 年末年始のみ

■拝観料 大人

600円

高・大学生

350円

小・中学生

250円

高野町に住民票がある方、高野町内の学校に在籍する学生の方は入館無料です。

■専用駐車場あり



重文 深沙大将立像（快慶作 鎌倉時代）9月30日まで出陳

第110号 目次

春期企画展のご案内	2～3
収蔵品の紹介84	4
高野山の古建築 第十四回	5
考古学から高野山の伽藍	
「中門」を考える(その二)	6～7
高野山の考古学(二)	8～9
高野山の文書(一)	10
高野山霊宝館からのご案内	11
霊宝館の庭園	12

春期企画展

「火災と高野山 —よみがえるその歴史と暮らし—」

4月26日(土)～7月13日(日)

5月5日(日) こどもの日 小・中学生無料

5月15日(水) 開館記念日 無料開館

(国際博物館の日協賛)

毎月21日(弘法大師の日) ご来館の方にプレゼントあり！ ホームページ割引券もご利用ください

平成26年度 春期企画展

「火災と高野山

— よみがえるその歴史と暮らし —

期間 平成26年4月26日(土)～7月13日(日)



礫石経 (史跡高野山町石・鎌倉時代)



瓦器小椀 (密教法具 六器・鎌倉時代)



欧州産 塩釉葉藍彩髹徳利 (17世紀前半)



輸入磁器碗 (清時代)

主な出陳品

彫刻

重文 木造阿弥陀如来坐像
重文 木造不動明王坐像
重文 木造大日如来坐像

地蔵院
正智院
金剛峯寺

工芸

重文 梵鐘
朱漆塗金剛盤
金剛盤・六器 (伝行勝上人所持)

金剛峯寺
無量光院
蓮華定院

絵画

高野山蓮華曼荼羅図
高野山内絵図

報恩院
金剛峯寺

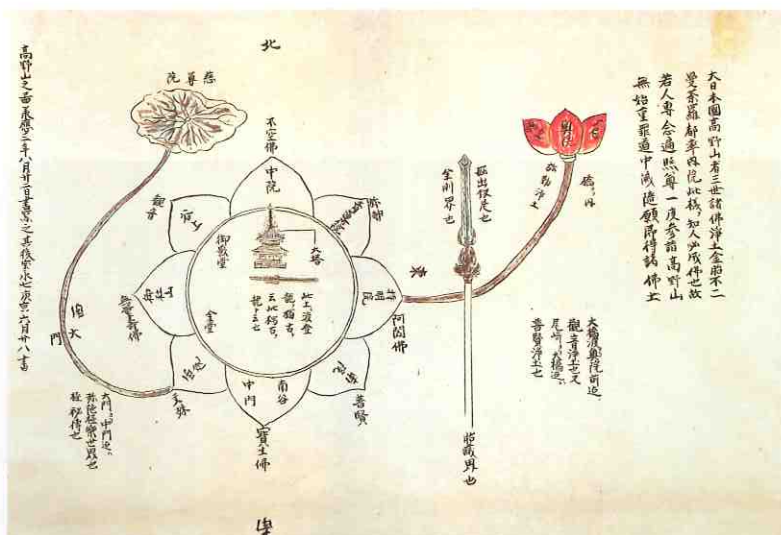
弘仁七年(八一六)高野山が開創され、平成二十七年(二〇一五)には千二百年目の記念すべき年を迎えます。長い歴史の中では、興隆もあれば荒廃の時期もありました。
特に、高野山がダメージを受けたのは「火災」で、その度に多くの文物が失われましたが、先人達は並々ならぬ苦勞を重ね、高野山の復興に懸命に取り組んできました。その努力の積み重ねが、今日の高野山の歴史的景観や文化財を守り伝えたのは言うまでもありません。

「火災」は負のイメージの歴史ではありますが、火災をくぐり抜け守り伝えられた文化財は、その当時の状況を如実に物語ります。

今回の企画展は、高野山内の「金剛峯寺遺跡」などから発掘された火災跡に関連した埋蔵文化財(出土品)を中心に、当時の高野山上の歴史と暮らしにスポットをあて、高野山の歩みを紹介します。



朱漆塗金剛盤（無量光院・室町時代）



高野山蓮華曼荼羅園（報恩院・宝永7年〈1710〉）



焼土層剥取標本（18世紀～現代）



中門火災跡検出状況（19世紀前半）



一石五輪塔出土状況（15世紀後半）

考古

埋蔵文化財

金剛峯寺遺跡

輸入磁器碗

瓦器小塊（密教法具六器・二器）

欧州産塩釉藍彩髹徳利

土師器、瓦器、国産陶磁器、輸入陶磁器、硯など

史跡高野山町石

礫石経

《参考出陳》

史跡金剛峯寺境内（奥之院地区）

一石五輪塔

発掘調査遺構、火災関連写真パネル

火災による焼土層剥取標本

※4頁に関連記事掲載

金剛峯寺

同時開催

「いろいろな弘法大師像」

稚児大師像 室町時代

正智院

前期 4月26日（土）～6月8日（日）

重文 八宗論大日如来像 鎌倉時代

善集院

後期 6月9日（月）～7月13日（日）

木造萬日大師像 室町時代

金剛峯寺

弘法大師十大弟子像 江戸時代

金剛峯寺

などを出陳

「様々な曼荼羅の形」

両界曼荼羅図（血曼荼羅）レプリカ

金剛峯寺

両界種子曼荼羅図

金剛峯寺

如宝愛染曼荼羅図

金剛峯寺

収蔵品の紹介 84

重要文化財

阿弥陀如来坐像あみだにょらいざざう

平安末〜鎌倉時代（一二〜一三世紀）

地藏院蔵 木造漆箔

像高230・0 cm



霊宝館新館に入ると、まず目に飛び込んでくる大きな仏像をご存じの方は多いかと思います。高野山では数少ない丈六仏です。丈六とは一丈六尺（約四八〇cm）のことで、釈尊（釈迦如来）の身長が丈六とされ、座とその半分の、高さ約二四〇cmの仏像を丈六仏といいます。

本像は、明治十五年（一八八二、明治十七年説も）まで蓮花谷（荊萱堂の一の橋付近）の、現在の熊谷寺

の場所にあった丈六堂と呼ばれる阿弥陀堂の本尊でした。『紀伊続風土記』によると、仁平元年（一一五一）、鳥羽法皇の御願により阿弥陀堂が創建され、仏師法眼円信作の丈六金色阿弥陀如来像を安置した、とあります。本像がこれにあたるといわれますが、像の彫法がもう少し後の鎌倉時代の作風であるとの意見もあり、断定は難しいようです。

なお、本像の光背は上部が欠けていますが、これはお堂が火災に見舞われた際、慌てて運び出して破損した、と考えられています。いつの火災かは推定しかねますが、記録に残るものだと『高野春秋編年輯録』には慶長六年（一六〇二）八月一日、蓮花谷で火災が起こるも阿弥陀像を「曳き出し」、被害を免れた、とあります。

高野山は火災が多く、山内堂舎の大部分が焼失するような大火も一二〇〇年の歴史の中では何度か起こっています。歴史ある文化財が現在数多く伝わっている背景には、そうやって危機から救い出し、護ってきた多くの人々の努力・苦勞があることを思い起こさせ、また我々も後世に伝えていかなければならない、という責任を感じさせます。

(F)

連載

高野山の古建築

第十四回 県指定文化財 金剛峯寺大主殿(四)

鳴海 祥博



大主殿と台所 右の大きな三角形の妻飾りの建物が台所。左に入母屋屋根の大玄関が建つ。その左が大主殿。台所の右手前に唐破風屋根の小玄関がある。



台所の小屋組 太い梁を縦横に架け渡し、その上に沢山の束を建てて屋根を支えている。中央に見える壁は煙出しで小屋組を突き抜け屋根の上に出る。



「明かり取り」の全景 明かり取りの上方は四方に軒が回っていて、本来中庭であることがわかる。床には簀の子が敷かれ、中央に水槽が据えられている。右手は台所と大主殿を繋ぐ渡り廊下で、かつては明かり取りとの間に建具が入っていた。写真奥は大主殿の土室の間。



大釜と煙出し 台所の中央に三口の大釜が据えられている。焚口は煙出し側にある。右手端に小屋組から吊り下げられた棚が見えるが、鼠から食物を守る棚で、高野山独特の施設である。

金剛峯寺大主殿は正面の長さが五四mもある大きな建物ですが、これは向かって左手に建つ「大主殿」と右手に建つ「台所」、その間を繋ぐ「大玄関」そしてそれらの奥に建つ「奥書院」や「居間」など沢山の建物が一群となつて構成されています。

大主殿と台所との間に張り出した入母屋根の大玄関は人目を引きませんが、台所の正面右端にも唐破風屋根と差し掛けの庇の付いた「小玄関」があります。大玄関は金剛峯寺の住職である座主や皇族、高僧など限られた人だけの出入り口で、小玄関は山内寺院の住職専用の出入り口です。台所の正面には大主殿へ続く広縁があつて、その奥に小部屋が並んでいます。表部屋と呼ばれるこの部屋は寺院を運営するための事務所として使われていた所で、現在も参詣者の受付となっています。

表部屋の奥は広い板敷きとなっていて、ここが厨房としての本来の台所部分です。黒光りする床板が印象的です。天井はなく、巨大な梁が組み上げられ、豪快な大空間となっています。台所の中央には大きな煙出しが小屋組と屋根を貫いて聳え、煙出しの西側に大釜が三口据えられています。これらの釜で一度に約二千人分のご飯を炊くことができるので、いかに大きな法要や儀式が行われていたかを物語っています。

図1 中門変遷図

時期区分	年号(西暦)	状況	位置	概要
1期中門	弘仁10年 (819)	建立	壇上金堂前	鳥居状の簡易な施設を建立
2期中門	承和14年 (847)	再建	壇上金堂前	簡単な形式の門を建立
3期中門	永久3年 (1115)	再建	壇上金堂前	三間一階の八脚門を建立
4期中門	永治元年 (1141)	移建	壇上南側の現在の 中門跡地	3期中門の三間一階の八脚 門を、現在の中門跡地に移 建
5期中門	建長5年 (1253)	再建	壇上南側の現在の 中門跡地	五間二階の楼門形式に造替
	安永3年 (1774)	焼失		
6期中門	安永8年 (1779)	再建	壇上南側の現在の 中門跡地	五間二階の楼門を再建
	文化6年 (1809)	焼失		
7期中門	文政3年 (1820)	再建	壇上南側の現在の 中門跡地	五間二階の楼門を再建
	天保14年 (1843)	焼失		
8期中門	平成27年 (2015)	再建	壇上南側の現在の 中門跡地	五間二階の楼門を再建予定

考古学から高野山の伽藍「中門」を考える (その二)

―五期から七期中門にかけての礎石と雨落溝から

中門再建に伴う発掘調査を行うに当たり、事前調査として文献、古絵図などの調査を行いました。その結果、中門は弘仁十年(八一九)、高野山が開創された当初に建立された

「二期中門」以来、文政三年(一八二〇)に「七期中門」が再建されるまで、幾度もの造替、移建、再建を繰り返し、七期にも亘って存在したことがわかりました(図1)。

特に、一期から三期中門が位置していた場所は、いずれも壇上、つまり現在の金堂の南側正面の位置(中門跡北側の一段高い場所)に存在したことがわかりました。

その後、四期から七期中門の位置する場所は、金堂のある壇上から金堂の南側の一段低い場所(以下、「南側」という)、つまり現在の中門跡に存在していたことがわかりました。中門の建立場所が、壇上から南側に移り変わった一二世紀は、相次いで伽藍の諸堂塔が建立、また再建された時期でした。

例を挙げると、康和五年(一一〇三)に根本大塔再建、大治二年(一二七)に西塔再建、東塔建立、久安六年(一一五〇)に金堂再建、平治元年(一一五九)に六角経蔵建立、永万二年(一一六六)に三昧堂再建、安元元年(一一七五)に大会堂建立、正治二年(一二〇〇)に孔雀堂が建立されました。

これらの諸堂が建立、再建された理由は、平安貴族らの高野詣に伴う寄進により、伽藍の諸堂の整備が進んだためで、その結果、手狭になりつつあった伽藍の敷地を大きくする必要に応じて中門を移築したものと考えられます。

この一連の整備により、金堂と中門との間隔の空間を拡張するために、壇上の三期中門を南側に移建し、四期中門としたものと考えられます。

しかし、中門は位置が南側に移動してから、相次いで火事に見舞われます。「五期中門」は安永三年(一七七四)、「六期中門」は文化六年(二八〇九)、そして最後に再建された「七期中門」も天保十四年(一八四三)の火災により焼失しました。

発掘調査は、これらの歴史的事象を念頭に進められ、その結果、既刊号(九九号)で報告したとおり、中門跡で露出している礎石群が七期中門の



図2 七期・六期・五期中門の礎石（東から）
※ ①七期中門礎石 ②五期から六期中門にわたって用いられた礎石



図3 発掘調査地全景（北から）
※ 写真奥は七期中門の礎石群 礎石群の北側では雨落溝を検出。
※ 礎石周囲の赤い土は、天保14年（1843）の火災による焼土。



図4 七期・六期・五期中門の雨落溝（東から）

ものであることが確認されました。

さらに、七期中門の礎石の直下を掘削した結果、五期と六期中門の両時期にわたり用いられた礎石が確認されました（図2）。

以上のことから中門は、建長五年（一二五三）の五期中門の再建から、天保十四年（一八四三）の七期中門の焼失までの五九〇年間、同じ位置で、しかも建物軸が変わることなく、再建を繰り返していたことがわかりました。

また、礎石の上に建っていた上部建物についても調査を進めました。

発掘調査では、地面より上の情報が得られないように思われるかも知れませんが、かつて存在した建物の規模や構造などについても情報を与えてくれます。

一般的に、建物には屋根があります。雨が降ると雨水は屋根の軒先に集まり、そして地面に落ち、雨水は軒の長さの分だけ洗掘し、地面には自然に溝ができます。あるいは、水はけを良くするために、建物に付随する施設として、あらかじめ屋根から雨水が落ちる位置に溝を掘ること

ます（図3）。

調査では、七期中門の礎石群の北側で雨落溝が検出されました。そこで、七期中門の雨落溝の下層を掘削したところ、六期中門の雨落溝、さらにその下層から五期中門の雨落溝が確認されました。

これらの礎石と雨落溝の各軸部間の距離を測ることにより、建物の屋根の軒出の長さ（柱芯から軒先までの長さ）、つまり建物の屋根の規模がわかります。計測の結果、建物の柱間の距離は変わらないものの、五期は三〇五センチ、六期は三二五セ

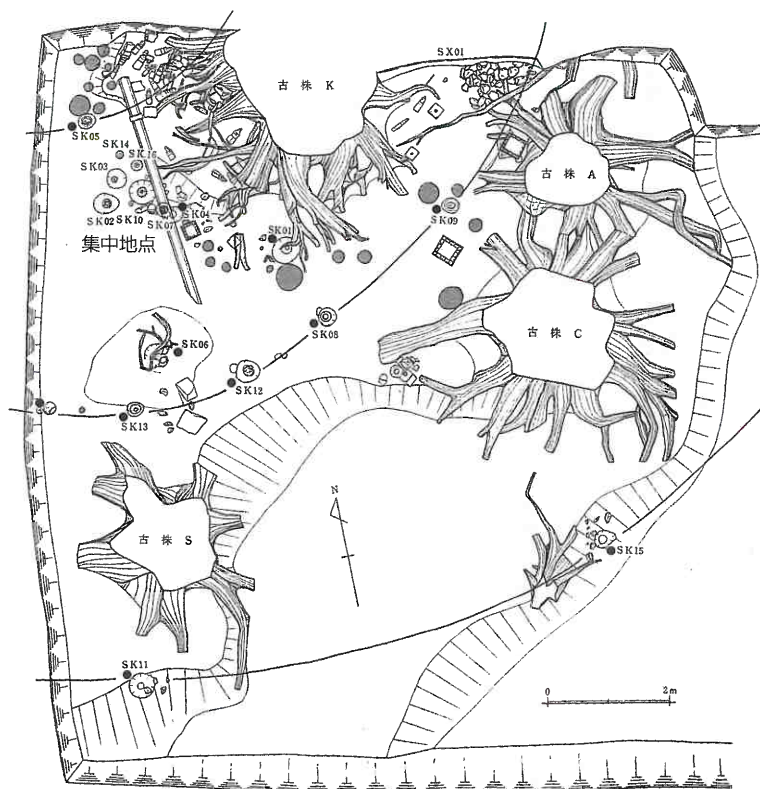
ンチ、七期は三八〇センチと徐々にその長さが長くなっていることがわかりました（図4）。このことは、中門の建物の軒出の長さが、再建の度に徐々に長く大きくしていたことを意味しています。つまり、中門の建物の屋根の規模を大きくすることにより、伽藍の荘厳化が図られたことがわかりました。

中門が再建を繰り返しながら、あらゆる時代に存在し続けたことから、いつの時代においても、高野山、伽藍にとって、信仰上不可欠な建物であったことが窺えます。（T・S）

納骨信仰のはじまり

公益財団法人 元興寺文化財研究所

狭川 真一



第二燈籠堂建設地点の遺構配置図 (1 / 150)
 (『高野山発掘調査報告書』の図に加筆)

奥之院の御廟周辺で正式な発掘調査が行われたのは、昭和五二年が最初で、第二燈籠堂建設に先立つものです。調査の場所は、御廟から南東方向へ約一〇〇坪の地点で、御廟付近から見ると少し低くなったところ です。調査は私の勤務する元興寺文化財研究所が担当しましたが、その当時私はまだ高校生でしたので、現地調査には残念ながら参加していません。

さて、発掘した面積は一二〇平方坪とそれほど広くはなく、また調査地の各所に樹齢約六〇〇年もある大きな切株が残っていたのと、南東側が傾斜面となっていたので遺跡は残っていませんでしたが、調査箇所 の北東側の四〇平方坪ほどには平安時代から鎌倉時代の納骨信仰をうかがわせる重要な遺構が眠っていました。

納骨の遺構

まず図面を見て下さい。●印を付けて番号を記載しているところが納骨器の埋まっていた地点です。このうち集中地点と記載しているところについては、次回にご紹介したいので今は触れません。

さて●印地点に注目すると、それぞれがある程度の間隔をおいて配置されているのが分かります。これは納骨当時、目で見て分かるような施設が地上にあったことを示しています。しかし、長い年月の間に消滅してしまつたようなので、おそらく盛り土程度(あるいは木製の卒塔婆くらいは立てたかも知れませんが)の簡素な標識だったと思います。その規模は、納骨器の配置された間隔から推定して、最大でも直径一坪前後のものだったでしょう。これは決して

規模の大きなものではありません。しかも注意すべきことは、写真にもあるように埋納のための施設がきわめて簡素であると言うことです。ほとんどの遺構は地面に納骨器が入る程度の穴を掘り、そのまま納骨器を埋納しています。一部に石を使って固定するものもありますが、石室を作ったり、石で覆ったりするものはありませんでした。これは、前回ご紹介した法薬尼の経塚と同様に、弘

法大師にお護りいただけると信じていたからこそと思われる。

納骨器の製作地と年代

さて、それらはいつ頃の出来事なのでしょう。それを物語るのには納骨器そのものです。ここで発見された納骨器の多くは中国製の輸入陶磁器で、南宋代の白磁四耳壺が中心です。また古瀬戸や常滑焼などの国産



第二燈籠堂建設地点の納骨器出土状況（東から）

の陶器類も含まれています。その年代は十二世紀後期から十三世紀前期、いわゆる平安時代後期から鎌倉時代前期頃にかけてです。その頃、輸入陶磁器が多量に発見される日本の生活遺跡は、平安京を筆頭に、対外交易の窓口である博多や大宰府、東北の拠点だった平泉などをあげることができます。つまり、当時の政権担当者やそれに近い立場で交易に携わっていた人たちに限って、入手

できたものと考えられます。このことは高野山に納骨をした人々の社会的な階層を物語っていますが、地理的な条件を踏まえると、平安京に住まう皇室や貴族、それを出自とする高位の武士や僧侶等に限定できると言えます。

納骨遺構の配置

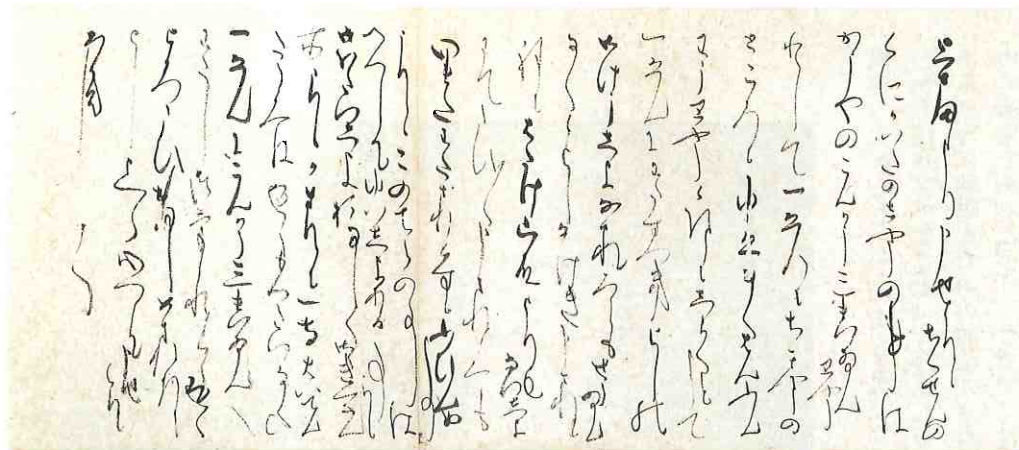
最後に納骨の遺構配置を見てみましょう。納骨器は御廟（この図で言えば左上方向になります）を中心に、弧を描くように配置されています。少なくともこの調査区では三重程度の円弧状になっていた可能性があります。容器の年代観は、御廟に近いほうがやや古いようです。この調査だけでの断定は難しいですが、納骨する場所の選定にあたって、何らかの制約があり、しかも徐々に外側へ広がっていった様子もうかがえます。この状況は、秩序立てて埋納することが必要なほど、御廟周辺に納骨することが人々の間に浸透するとともに、人気が高まっていたことを教えてくれます。

【参考文献】

（財）元興寺文化財研究所 一九八二『高野山発掘調査報告書』

高野山の文書 (二)

北条政子自筆書状における「はたけ山殿」について



北条政子自筆書状

「金剛三昧院文書」に属するこの書状は「二位家仮名御書」と呼ばれ鎌倉時代から大切に保管されてきた書状で、北条政子自筆の書状であるとされています。

その内容は金剛三昧院領の筑前国粥田庄が何者かに半分押領されていて、將軍家の御教書や「はたけ山殿」の内書がたびたび出されているにもかかわらず、返付されていない状況を嘆き、「この寺」（金剛三昧院）が特に由緒のある「御菩提所」「御祈願所」であるため、早く同院に押領分を返付するように求めたものです。

金剛三昧院は、建暦元年（一二二一）に北条政子（一一五七～一二二五）が夫である源頼朝（一一四七～一一九九）の菩提を弔うために建立した禪定院が前身で、承久元年（一二一九）に息子の源実朝（一一九二～一二一九）の菩提を弔うために金剛三昧院と改号し、貞応二年（一二二二）に堂舎

が完成しました。のちには源家三代の菩提所と称され、歴代長老は鎌倉幕府から任命されるなど、鎌倉幕府と密接な関係にありました。室町時代にも歴代將軍の帰依を受けています。応永三十四年（一四二七）に火災にあった際も室町幕府の援助により再興を果たしています。

このように中央権力と密接な関係にあった金剛三昧院の所領問題に助け船を出したのが北条政子と「はたけ山殿」です。「はたけ山殿」は今まで、幕府宿老であった畠山重忠（一一六四～一二〇五）のこゝろと考えると考えられていました。しかし、重忠は北条氏の策謀で元久二年（一二〇五）に死亡しています（畠山重忠の乱）。金剛三昧院ができた時、すでに重忠は亡くなっているのです。また、他の史料から、粥田庄が金剛三昧院并多宝塔に寄進されたのは貞応三年（一二二四）が有力です。これでは重忠が金剛三昧院領の粥田庄の問題に関与することは

できません。よって、「はたけ山殿」は畠山重忠とは考えにくいのです。

では、「はたけ山殿」とはいったい誰でしょうか。畠山氏は乱により滅亡し、その領地と名跡は重忠の未亡人と結婚した足利義純（一一七五～一二二〇）に引き継がれました。そして、二人の子ともである泰國（？）が畠山姓を名乗り、以後源姓畠山氏として存続し、室町時代には足利一門として幕府重鎮となります。泰國の生没年は不明ですが、生年は、重忠、義純の没年から一二〇六～一二二一年と考えられます。没年も不明ですが、『吾妻鏡』に一二四〇年代に名が現れていることから、一二四〇年代まで生存していたことは確実です。「はたけ山殿」は畠山泰國は可能性があります。

嘉禎四年（一二三三）に泰國の叔父である足利義氏（一一八九～一二五五）が政子の菩提のために、金剛三昧院に大仏殿を建立し、美作国大原保を寄進しました。これが足利氏と金剛三昧院の密接な関係の嚆矢とされています。しかし、それ以前に足利一門の泰國が金剛三昧院を援助していたとすれば、この書状は北条政子自筆というだけでなく、足利氏と金剛三昧院、ひいては高野山の関係を考える上でも興味深い史料です。

(T・M)

高野山霊宝館からのご案内

■ これからの展覧会

○ 第35回高野山大寶蔵展

「高野山の名宝」

〔会期〕平成26年7月19日（土）
～10月5日（日）

■ 外部展覧会

○ 大阪市立美術館

「山と神仏」

〔会期〕平成26年4月8日（火）
～6月1日（日）

○ 秋期企画展

「国を護る神仏（仮）」

〔会期〕平成26年10月11日（土）
～平成27年1月12日（月・祝）

○ 読売展

「高野山の名宝展」

〔会期〕平成26年10月11日（土）
～12月7日（日）
〔場所〕東京サントリ―美術館

○ 冬期平常展

「密教の美術」

〔会期〕平成27年1月17日（土）
～3月22日（日）

〔会期〕平成27年1月23日（金）
～3月8日（日）

〔場所〕大阪
あべのハルカス美術館

○ 日本国宝展

〔会期〕平成26年10月15日（水）
～12月7日（日）

〔場所〕東京 東京国立博物館

本館で展示しております重文
沙大將立像（快慶作 鎌倉時代）は
保存修理のため、9月30日（火）ま
での展示となります。来山の折には、
是非ご拝観ください。



重文 深沙大將立像



重文 孔雀明王像



国宝 阿弥陀聖衆来迎図



恵光童子



烏俱婆識童子



恵喜童子



矜羯羅童子



制多伽童子



清浄比丘

国宝 八大童子立像（うち六体）

● 文化財特別公開

○ 国宝 不動堂



〔期間〕平成26年8月27日（水）
～8月29日（金）

〔場所〕伽藍
午前9時～午後4時30分

○ 重要文化財 徳川家霊台



〔期間〕平成26年11月1日（土）
～11月9日（日）

〔場所〕徳川家霊台
午前9時～午後4時30分

展示及び公開内容の詳細は、次号以降の『霊宝館だより』や高野山霊宝館のホームページなどでお知らせいたします。

霊宝館の庭園

ヤマボウシ・山法師・御前櫨・地蔵頭・やまくわ

元高野山高等学校長 亀岡 弘昭

ヤマボウシはミズキ科・ヤマボウシ属の落葉高木です。

高野山塊では山頂部にも自生しますが、個体数は少なくなっている樹種の一つです。庭木などとして植栽されているものは、山上の街筋でも見（観）ることが出来ます。

和名のヤマボウシ（山法師）、数多くある別称や方言名のうち、ほん（坊主）・こぜんがし（御前櫨）



小花の集まりと総苞片

などは枝先の淡緑黄色で頭状の小花の集まりと四枚の花弁状の白い（ま

れに淡紅色のものも）総苞片の容態を僧形（僧の姿）にみたてての命名です。じぞうがしら（地蔵頭）・じ

ぞうがし（地藏櫨）という方言名もあります。高野山近辺や和歌山県下

には、この花形に由来する、つくばね（突羽根）という名も、のこつて

います。この花は「白々と咲く」「清らかに咲く」「白くさみしく咲く」「じみな花」などと表現されていることもあります。



幹と集合果

花期は植物図鑑などでは五月〜七月となつていますが、高野山上では六月中下旬から七月に見（観）られます。

成木・老木の樹皮は黒褐色で光沢があり、材が堅く強靱なためブナ科のカシ（櫨）などとともに器具や道具の柄などに用いられ、学名にも「角・つの」という意味をもつラテン語が採用されています。

大阪府下や和歌山県下には、この樹の小枝の分岐形状による、とりのあし（鳥足）という方言名も。

やまくわ・やまぐわの名で呼ばれている（いた）地方が多いというところですが、その理由は、この樹の果実が頭状に集まる小花から生じる、それぞれの果実が形成過程において互いに癒着して一

つの大きな果実となる集合果であり、しかも生食できるという、クワ科のクワ（桑）との共通性のあることによる命名と思われます。山野に生える桑ということでしょうか。高野山頂部にはクワ科の和名をヤマグワという樹種も自生しています。

ヤマボウシの果実は、未成熟のものは淡緑色、秋になると赤色、熟して赤黄色となり、比較的長い果柄によつて下垂する特徴があり、完熟後地表に落下します。完熟したものに薄甘い味があります。高野山頂部での完熟期は、これまでは十月の中下旬でした。

この果実が集合果であるという証拠となる、果実の表面の凸状の模様が、釈迦如来像の螺髪（卷毛）に似ていると書き表されている高名な植物学者があります。

四季の移ろいは、はやく、まだまだ先のことと思つている、この樹の花の季節も、あつという間に、やっ